

小人

マテーウス・フォン・コリーン

薄暗い光の中に

山々はすでに消えてゆき

穏やかな海に

一艘の舟が漂っている

舟には王妃とその小人の姿がある

王妃は 高き天穹 でんきゆう)を

見上げる

天の川の鈍く輝く

光の織り成す青き彼方を

決して決して私に嘘を

言わなかつたわね 星達よ」

王妃はそう叫ぶ 私は間もなく

消えゆくとお前達は告げる

けれども私は

本当に喜んで死ぬのよ」

そこへ小人が王妃のもとに近づく

彼女の首に赤い絹の紐をかけ

そして泣く まるで悲嘆の涙で

視界を曇らせようとするかのようだ

小人は言う 『これは自業自得だ

王の為に俺を捨てたのだからな

今は貴女の死だけが

俺に残された唯一の喜びだ

それでも俺は この手で貴女に死を

もたらす自分を永遠に憎むだろう

それでも貴女には 早々に死んで

もらわなければならぬ」

王妃は 若き生命の溢れる胸に

手をあてる

そしてこぼれ落ちる重い涙を

祈りながら 天に向ける

私が死んでも悲しまないでね」

王妃がそう言つと

小人は王妃の青ざめた頬に

口づけをする

やがて次第に

王妃の意識は薄れていく

小人は 死神に捕らわれた女を

見つめる

そして自らの手で

その亡骸を海の底深く沈める

小人の胸には 王妃に対する

熱い想いが燃え上がる

小人を乗せた舟が着岸することは

決してないだろう